

---

# ヒーダマ

源雪風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ビーダマ

【ノート】  
N1008Q

【作者名】  
源雪風

【あらすじ】  
ふしぎなビーだまをてにいれたしょうねんのかつとう

僕の宝物は透明なビー玉だ。

でもただのビー玉じゃない。

握ると空を飛べるすごいやつだ。

でもこのビー玉を返さないといけない。

手に入れたいきさつがちよっぴり不安だから。

散歩していて偶然廃遊園地を見つけた。

そこで見つけた機械人形の左目にあつたのを取ってきた。

どうしてもビー玉が欲しくてたまらなかつた。

ビー玉にはものすごい力があつた。

でも左目を失つた機械人形のことを考えると、かわいそうで罪悪感に襲われる。

機械なのだから目を失つても悲しむことなどないのに。

ビー玉の特別な力が機械人形にとって大切なものだったら、返さないといけない。

それに機械人形の持ち主に見つかったら大変だ。

すごい力のあるビー玉を持っているくらいだから、機械人形の持ち主はただものじゃないかもしれない。

怒って呪いをかけてくるかもしれない。

夢に左目のない機械人形が出てくることもある。

人形は何をするわけでもなく、佇んでいる。

やっぱり返さないといけない。

意を決してビー玉を返しに行くことにした。

雨の中、傘をさしてとぼとぼ歩く。

機械人形の元へすぐ着いてしまった。

でもビー玉を返せなかつた。

人形をかわいそうだと思っていたくせに、ビー玉を持っていたという気持ちで勝ってしまったって動けなくなった。気付いたら機械人形に背を向けて走り出していた。傘は置いてきてしまった。びしょぬれになった。

駄菓子屋で空を飛べるビー玉とそっくりのやつが売っていた。それを買った。

何も返さないよりは、偽物でもいいから返そうとずるいことを考えた。

ビー玉を二つポケットに入れて、機械人形の元へと向かう。返す前にどっちが本物が確かめる。

本物は握れば体が浮く。

でも、どっちを握っても体が浮くことは無かった。

悪い心を持ったから、力が失われてしまったのかもしれない。

もうどっちが本物だったか分からない。

とりあえず一つを左目にはめておいた。

もう一つはまだ持っている。

でも、もう空は飛べない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1008q/>

---

ビーダマ

2011年1月16日02時23分発行